

クリプケンシュタインのパラドクス再訪：自然主義 的観点から

篠原，成彦
信州大学人文学部：准教授

<https://doi.org/10.15017/1446187>

出版情報：哲学論文集. 47, pp.121-136, 2011-10-01. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

クリプケンシュタインのパラドクス再訪

——自然主義的観点から——

篠原成彦

はじめに

結局のところ、どう頑張っても心については何かしらの謎が残るのかもしれない。だが、早まって心を神秘視しすぎるようなことはしたくない。そう思うかぎり、我々は、心的諸現象の自然主義的な説明、すなわち心の自然化 (naturalization) を試み続けたいわけにはいかない。

さて、何じとかを信じることや欲すること、また知覚することなどとともに、言語表現によって何じとかを意味する（意味している）ということもまた、我々に帰される心的状態の一種である。では、意味することは何らかの自然現象に還元されうる状態なのだろうか。率直に言って期待はできない。しかしまた、そうした還元を不可能と認めるとしても、それは必ずしも意味することの自然化を不可能と認めることではない。何じとかを意味するという心的状態は、自然現象への還元が不可能であるばかりか、そもそも概念上成立不可能なのであり、ただそれが現に在るかのように見える状況が、ある種の自

然現象によって演出されているにすぎない——ということが、もし判明したとすれば、それは、還元ではなく擬制化¹とでもいふべき仕方²で、意味することの自然化が推し進められたことになるだろう。

そして、いわゆるクリプケンシュタイン（慣例(?)に従って、本稿では「クリプキ描くところのワイトゲンシュタイン」をこう呼ぶことにする)のパラドクスは、まさに意味することの成立不可能性を帰結するものだった。さらに、それを踏まえて与えられた彼(文面の簡潔化のために、クリプケンシュタインを擬人化して、しばしばこんなふうに「彼」と呼ばせていたきたい)のいわゆる懐疑的解決は、擬制としての意味することが、言語をとまなう我々の行動における一致に支えられて出現するさまを描くものだった³。この一致は明らかに、言語使用者である我々ヒトの生物学的同型性を主たる要因とする自然現象だ。つまり、ワイトゲンシュタインとクリプキが自然主義者であるか否かにかかわらずなく、クリプケンシュタインのパラドクスと懐疑的解決は、意味することの自然化という課題に対する一つの処方を与えていたのである。

かつて私はこのことに気づき、クリプケンシュタインの主要な論点を、自らの見解に取り込むことにした⁴。しかし後述するとおり(2にて)、懐疑的解決については当初から、我々はいっさいの事実を語りえないということが、そこから帰結してしまうのではないか、また、意味するという概念に不当な制約を押しつけるものではないか、という二つの疑惑が指摘されていた。それゆえ、これらの疑惑に対処することが、私にとっては一つの宿題となった。ずいぶん遅くなったが(十八年も経ってしまった!)、本稿において私はこの宿題を果たそうと思つた。以降では、1においてまず彼のパラドクスを再構成し、2において、懐疑的解決の概略を示したうえで、二つの疑惑を具体的に述べる。そして3において、それらへの対処に取り組む。

なお、本題に入る前に、「懐疑的解決」という呼び名について一つ釈明をしておきたい。クリプキ自身は、クリプケンシュタインのパラドクスを、「意味する」という罪のない概念を巧妙にも断罪してのける懐疑論として描いており、そうした懐疑論としてのパラドクスを受けいれつつの解決という意味で、「懐疑的解決」という呼び名を用いている。しかし、私自身

はむしろ、意味するという心的状態の成立不可能性を積極的に認めたいと考えている。それゆえ、「懐疑的解決」という呼び名は、私にとっては不本意なものだ（すなわち、それは何ら「懐疑的」ではない）。とはいえ、この呼び名を用いないわけにはいかない。そのため、どうしても私の議論には、「懐疑的」という表現を用いつつ、ちつとも懐疑論を扱っているようではない（実際、そのつもりはない）という、ちぐはぐなところが出てきてしまう。この点については、致し方ないこととして見逃していただきたいと思います。

1 クリップケンシュタインのパラドクスを再構成する

クリプケンシュタインのパラドクスは、次の (3) を最終的に帰結するものである。

言語的な諸表現によって、我々が何かことを意味するということはありえない。

……

この に到る道のりの出発点にクリプケンシュタインが据えているのは、「57+8=」(4)「」の答えは「5」でよいのでは？…と
いう奇妙な問いである。だが、それを通じて実際に問われているのはこういことだ。

あなたはこれまで、「+」記号によって、はたして特定の関数を意味してきただろうか？

……

そして、次に記す一般的な問いの「+」記号ヴァージョンとでもいうべきものである。

あなたはこれまで、何らかの言語表現で、はたして特定の何かを意味してきただろうか？

……

クリプケンシュタインの議論は、まず に対する否定的回答を導き、そこから、論証に用いられた戦略の一般性をつづじて

に対する否定的回答へ、さらには、へと到るものである。(4) ここでは、彼の手法にささやかなアレンジを施すことで、この道のりをなるべく手早く辿りたい。

まずは、自然数の順序対 $\langle x, y \rangle$ から \mathbb{N} のあらゆる関数が、なんらかの順序で番号をふられ、 $f_1, f_2, f_3, f_4, f_5, \dots$ と並んでいると考えよう。 私が向けられた問いであり、それに対する私の肯定的な答えが真であるとすれば、普通に考えるかぎり(普通でない考え方を次の段落で見ると)、これらの中に私が「+」記号で意味してきた関数があるはずだ。その関数は、 $12+7=9$ や $15+18=33$ 等々、私が過去「足し算」と称してやってきたことのほとんどに対して、いわばお墨付きを与えるものでなければならぬ。「 \mathbb{N} 」では、 f_5 と名づけられた関数がこの条件を満たしている——すなわち、 $f_5(2, 7) = 9$ 、 $f_5(15, 18) = 33$ 等々である——と仮定しよう。ただし、それに加えて、私は「 $57+68=?$ 」という計算問題に、実は今、生まれて初めて直面しており、しかも $f_5(57, 68) = 5$ であるところだ。むろん私には、「 $57+68=?$ 」に「5」と答えるべきだとは思えない。だが前提によって、これまで私が「+」記号を用いて行ってきたことに対して、 f_5 は整合的である。しかも、そうした関数は f_5 だけではない。57, 68 に0を写像する関数もあれば、1や2を写像する関数もある。むろん125を写像する関数も。「+」によって、私がそうした無数の関数のうちどれを意味していたとしても、これまで「足し算」と称して私が行ってきたことは矛盾しない。すなわち、過去の私の行動は、整合性という観点から見ると、それら無数の関数の中に、私が「+」記号で意味してきた特定の関数が存在するといふことを真たらしめるものではない。

では、私が「 $57+68=?$ 」に遭遇するのは今回が初めてではなく、かつては「125」と答えていた——実際そのとおりなのだ——としたらどうか。今度は、自然数 x, y と時点 t の順序三つ組 $\langle x, y, t \rangle$ から自然数 \mathbb{N} のあらゆる関数が、なんらかの順序で番号をふられ、 $g_1, g_2, g_3, g_4, g_5, \dots$ と並んでいると考えよう。これらの中には、私が昨日まで「足し算」と称してやってきたことのほとんどに対してお墨付きを与えつつ、57や68および今日以降の時点からなる順序三つ組に対しては5を写像する関数がある。むろん、5以外を写像する無数の関数も。「+」によって、私がそれらのうちどれを意味していた

としても、これまでの「+」をともなう私の行動には矛盾しない。つまり、次の が成り立つ。

整合性という観点から見る限り、過去の私の行動を参照することによって、
 的な答えは導かれない。 への肯定

……

なお、クリプケンシュタイン自身がこうした仕方では時点を利用してみせたのは、「+」ではなく「グリーン」という語に
 対してである。⁶⁾ すなわち彼は、N・グッドマンに倣って、昨日までの時点とグリーンの事物との対、および今日以降の時点
 とブルーの事物との対によって例化される、グルー (green) なる性質を導入し、私による昨日までの「グリーン」の適用事
 例が、グリーンに対してもグルーに対しても整合的であることを指摘する。むろん、グルー風の性質は他にいくらでも考え
 られる。私としては、私が「グリーン」によって意味していたのはやはりグリーンなのだ、と主張したい。だが、この主張
 を真たらしめる事実があるだろうか。定義によって、整合性という観点から見る限り、「グリーン」という語を伴う私の昨
 日までの行動によっては、これが真たらしめられることはない。そして明らかに、時点を利用したこの論法は、必要な変更
 を施すことで、他のどんな言語表現にも適用できる。つまり、次の が成り立つ。

整合性という観点から見る限り、過去の私の行動を参照することによっては、
 的な答えは導かれない。 への肯定

……

もっとも、この はさして深刻なものに見えない。「整合性という観点から見る限り」「過去の私の行動を参照することによ
 ては」という、二重の条件がそこにあるせいだ。要するに は、ある言語表現によって私は特定の何かを意味してきたとい
 うことが真であるためには、そのことを真たらしめる事実が、過去の私の行動における、その何かに対する整合性以外の側
 面が、さもなくば、過去の私の行動以外のどこかに存するものでなければならぬ、ということを示すにとどまっているので

ある。

そうした事実の候補としておのずと浮上してくるのは、言語表現の過去の適用事例に見とられる類似性と、私が意味してきたと思しき関数なり性質なり何なりの単純さだろう。すなわち、**ブルー**を例にとるなら、たしかにこれは私による過去の「グリーン」の使用に対して（定義上）整合的だが、第一に、昨日までの適用対象の間に見とられる類似性が、今日からは維持されなくなってしまう——つまり、「グリーン」と呼ばれる色が昨日までと違ったものになってしまう——し、第二に、これまで「グリーン」を用いる際に、ああも複雑な性質のことを私が考えていたはずがない、と思われるのである。「+」についても同様だ。

だが、クリプケンシュタインはこの二つの候補をあつさり退けてしまふ。彼によればまず、言語的諸表現の適用事例における**類似性**という候補は、の標的となることを免れえない。すなわち、一定の観点——形状、色、質感、動き、その他——に相対的な仕方**で類似性が扱われている**なら、その観点を表す言語表現について「あなたはこの表現によって特定の何かを意味してきただろうか？」と問われ、もしそうした観点なしに**類似性が扱われている**としても、「似ている」とか「同じ」とかいった言葉について同じように問われてしまふ、というのである。⁽⁶⁾

いっぽう、**単純さ**への訴えに対してクリプケンシュタインが指摘するのは、そもそも**単純さ**を手がかりになされる推理によつて、私は（たとえば）「+」によつてこの特定の関数を意味してきた、といった**事実が構成される**わけではない、ということだ。そうした推理は、無数の候補のうち、とにかくいずれか一つを私は「+」で意味してきたということが**事実**である場合にのみ、仮説として用をなす。だが、が示すように、彼の狙いはもともと、私が「+」で意味してきた特定の関数など無かつたのではないか、という疑いを提起することにある。それゆえここでは、**単純さに着目しての推理に此番は無い**。⁽⁷⁾

さて、ある言語表現によつて私が特定の何かを意味してきたということ**を真たらしめる事実のさらなる候補として提起される**のは、私はそれ**をある特定の仕方**で適用するよつにできている、という**事実**、すなわち、私の**身体（とりわけ脳）**がそ

うした適用をなす傾向性 (disposition) を実現しているという事実である。しかしまず、言語表現を私の意味することに適用して適用するということが、もし、私の物理的構造によって実現された傾向性がただ自然法則に従って発現するということであるとしたり、私には適用においてミスをおかす可能性が無いことになってしまう。私がどう振る舞おうと、それは常に自然法則のなせるわざであるからだ。それゆえ、この場にふさわしい傾向性とは、自然法則的なそれではなく、機械にあるはまる類のそれ、すなわち「その発現に支障をもたらす物理的变化が無いとき、かつそのときに限り、正常に発現する」といった条件を伴う（いわば）工学上の傾向性であるように思われる。だがここで問題になるのは、何かが傾向性の発現に支障をもたらす物理的变化であることはどうやって決まるのか、ということだ。それが決まるためには、問題の傾向性が正常に発現する／しない、すなわち、私が（いわば）正作動する／誤作動するとは、私がどのように振る舞うことであるのかということが、あらかじめ定まっていなければならない。そしてそれは、私の物理的構造そのものから一意的に割り出されるものではない。⁽¹⁾つまりいずれにせよ傾向性は、言語表現によって何ごとかを意味するという心的状態に求められている規範性 (normativity) —— すなわち、当人の行為がそれに適っていたり背いていたりしつるという性格 —— を内に宿すものはありえないのである。⁽¹⁾

こうなると、件の事実については、いよいよ、意味するということの心的状態そのものに求められるほかない。現代の心の哲学における標準的見解といえは機能主義である。では、「+」記号によってある特定の関数を意味しているという心的状態は、何らかの機能的状態として説明されうるだろうか。クリプケンシュタインによれば、それは不可能である。というのも、傾向性への訴えに対する彼の議論は、ほぼそっくり機能主義的な見解に対してもあてはまるからだ。要するに、私は「+」をどう操作するための機能的システムであるのかということとは、私の物理的構造そのものによって一意的に決まることではないのである。それでは、機能主義とはまた別の見方のもとでなら、表現の適用における正誤を一意的に定めるような心的状態の存在を、納得のいく仕方で認めることができるだろうか。できない、というのが彼の診断だ。私の過去におけ

る「+」や「グリーン」の適用事例が許したような解釈の多様性をけつして許さず、なおかつ、心に全ての適用事例が一挙に現れる（それは不可能だ！）といったことでもないような心的状態の存在を認めることは、彼によれば、説明不可能な神秘を心に帰すことであるというより、むしろ論理的な不可能事を心に押しつけることなのである。¹⁵⁾

概ね以上のような検討を経て、クリプケンシュタインは、ある言語表現によって私が何ごとかを意味してきたということを実たらしめる事実など、結局どこにもありはしなかったのだと宣言するに到る。これは、が次の に更新されるということにほかならない。

に對する私の肯定的な答えを、真たらしめる事實は存在しない

.....

つまり、言語表現によつて、私は今にいたるまで何ごとをも意味してこなかった、ということである。この「今」は時間軸上のどこにでも移動させることができる。そして、ここでの「私」は、誰でも——故人でもこれから生まれる人でも——かわない。かくして、ついに本章冒頭の へと到ることとなる。

2 懐疑的解決と二つの疑惑

とはいえ、じつさい我々の言語は、有意味であるようにしか見えない。我々はこれを、いったいどう理解すればいいのか。この問いに対するクリプケンシュタインの解答が、いわゆる懐疑的解決である。細部を省いてまとめると、懐疑的解決は、次に記す二つのテーゼからなるものといえる¹⁶⁾（なお、¹⁷⁾においては、任意の人を、任意の言語表現をとする）。

「 ρ 」は ρ によって ρ を意味している」という言明は、けっして**事実**を述べるものではないが、しかし、我々の生活においてある役割を果たす有用な言明である。

「 ρ 」による ρ の適用が、我々による一致した ρ の適用と頻繁に食い違つたらば、 ρ は ρ によつて我々と同じことを意味している」と述べることは不適切であり、「 ρ 」は ρ によつて我々と同じことを意味していない」と述べるのが適切である。

は、誰かが言語表現で何ごとかを意味するという**事実**はありえないが、意味するという心的状態を誰かに帰す言明には個有の役割がある、と主張するものだ。クリブケンシュタインによれば、そもそも、**事実**を述べるのが言語の基本的な役割であるわけではないのである。いっぽうは、「 ρ 」は ρ によって ρ を意味している」という言明が、それ固有の（**事実**を述べるといふこととは違つ）役割を果たす仕方を示している。つまるところ、この言明を使って**実質的に**なされているのは、使用を伴つ我々の言語ゲームへの参加資格が、「 ρ 」に認められるか否かの判定なのである。

ただし、**実質的には**そんなのだが、同時に「 ρ 」は ρ によって ρ を意味している」と述べるのが適切である場合それはまさに**事実**を述べている、と信じる人々が、実際に則っているものでもある。彼らは、「 ρ 」による ρ の適用が我々のそれと同じになるのは、「 ρ 」によつて ρ の意味していることが我々のそれと同じだからだ、というふうに信じるのである。そんな**事実**はありえないのだが、言語をともなつ我々の行動が一致し続けるかぎり、そう信じていて不都合をきたすことはない。つまり の運用においては、そうした仕方（私に言わせれば）**擬制としての意味すること**が演出されているのである。

さてしかし、冒頭に述べたとおり、懐疑的解決については当初から二つの疑惑が指摘されてきた。一つは にまつわるもの、もう一つは にまつわるものである。まず、 によれば、何らかの言語表現の我々による適用が、それによつて我々自

身の意味することに適っているということは、事実たりえない。しかしそうだとしたら、言語表現が特定の外延をもつということもまた、事実たりえないということになりはしないか。そしてそうなると、記述的言明が真であるということも事実ではありえない。ところが、記述的言明が真であるとは、まさにそれが事実を述べているということだ。記述的言明が真である、すなわち事実を述べているということが、もし事実たりえないのだとしたら、それは、我々にはけっして事実を語れないということにほかならない。¹⁶ こうした「事実たりえない」の連鎖をどこかで断ち切って、最後の受け容れがたい帰結を回避することが、はたして可能なのか。不可能ではないのか。——これが にまつわる疑惑である。

いっぽう、からは、たとえば「丸い」という言葉によって我々と同じことを意味していると認められてきた人が、無自覚に我々の一致したやり方とは違った仕方でも「丸い」を適用し始めたなら、その人は、「丸い」によって自分の意味していたことに無自覚に背き始めたとされうる、ということが派生するものと思われる。では、我々が無自覚に、一致して四角いものに対して「丸い」を適用し始めたかどうか。「*は*」によって…を意味している」という言明の役割が、におけるそれに尽きるなら、明らかに、その状況を、「丸い」によって我々の意味していたことに、我々自身が足並みを揃えて無自覚に背き始めた、と特徴づけることはできない。だが、これはまさしく、そのように特徴づけられるべき状況ではないのか。そして、こうしたいかにも当たり前の考え方を救済できないということとは、「*は*」によって…を意味している」という言明の役割を におけるそれに限定することが、誤っているということを示しているのではないか。——これが にまつわる疑惑である。

実のところ私は、これらの疑惑への対処については保留したまま——手立てを見つけきれなかったわけではない、決めきれなかったのである—— を受容した。 を受容したのは、かのパラドクスは却けられえないと考えたためでもあるが、それに加えて、かねてから、信念や欲求といったいわゆる素朴心理学（民間心理学 folk psychology）上の心的状態は、一個の人間における物理的状态に還元されえず、それゆえ、「信じる」や「欲する」を自他に適用する言明は、擬制的なもののみ

なされざるをえない、と考えていたためでもある。⁽¹⁶⁾「意味する」も素朴心理学の用語なのだから、「信じる」や「欲する」がそうであるように、これもまた擬制なのだと考えることは、それ自体、もっともなことと私には思われたのだ。また、私を受容したのは、「信じる」や「欲する」といった用語が、明らかに、行動傾向が類似している者の間で、またその類似の度合いに依りて、有用なものであるためである。つまり、我々の相互交渉の場でこそ、素朴心理学は機能するのであり、したがって、他の用語と同様に「意味する」もまた、そこに位置づけられてしかるべきだと私は考えたのである。そして、今も私は、こうした判断が間違っていたとは思っていない。

3 疑惑への対処

さて、問題は二つの疑惑だ。これらにはどう対処すればいいのか。結論から言うと、言語的諸表現の外延は、それらによって何ごとかを意味するという我々の心的状態によって決まるのではなく、言語使用における我々の傾向性に基つて観察者の観念から割り当てられるべきものだと考えれば、二つの疑惑には対処できる、というのが私の考えだ。以下において、この考えを具体的に説明していきたい。

我々は、さまざまな言語表現の使用における傾向性を身につけている。たとえば、丸くない事物に対して「丸い」という言葉を適用してしまうなどということは、多くの人がそうであるように、私も物心ついて以来やったことがない(と思う)。今後やってしまうことがあるかもしれないが、ごく希に、であろう。私が「丸い」について備えているのは、そういう傾向性である。実際にそうなのだから、丸い事物の集合を私の用いる「丸い」にその外延として割り当てることが、実践上、明らかに適切だ。そしてこのことは、およびと難なく両立する。すなわちまず、私は「丸い」という言葉によって丸いということの意味しているということが、事実たりえないとしても、そのことに、次の前提として付加されないかぎり、

私の用いる「丸い」が外延を持つということも事実たりえない、ということとは帰結しない。

私の用いる「丸い」の外延は、「丸い」で私が意味していることによって決まる。

そして、に代わるものとして、次の を導入すれば、「丸い」が外延をもつことは事実となるのである。

私の用いる「丸い」の外延は、その適用における私の傾向性に基づいて、観察者的な観点から割り当てられるものだ。

にまつわる疑惑には、基本的にこうした仕方では対処できる。そもそも、我々ヒトに限らず動物は、事物の種類や性質ないし状態に対する識別能力を備えている¹⁷⁾。それゆえ、我々の語彙の中には、その適用における傾向性が、そうした前言語的な識別能力にほとんど直結していると考えうるグループがある。上述の「丸い」をはじめ、「動く」といった事物の基本的な形状や状態に対する言葉は、そうしたグループに属しているものと思われる。実際、幼児の言語学習においては形状の類似性を頼りに言葉の適用範囲を拡張していく傾向が顕著であるとされるが、このことはそのまま、形状における同類性については細やかな認知が前言語的になされている、ということを示している。それゆえ、言語習得期の子どもにとって、このグループに属する表現の用法を習得するということは、その適用における傾向性が徐々に形成されていくというふうなものではなく、既に存在する事物の区分けにラベルを貼っていくことにおそらく近い。したがって、こうした言葉に対する外延の割り当ては、「丸い」の場合がそうであるようにたやすくなされ、しかもきわめて信頼度の高いものとなる。さらに、自然数列を書き連ねることや、数字を使って簡単な足し算を行うことも、物理的に同型な操作の反復として捉えるかぎりでは、事物の形状に対する前言語的識別能力への直結度が高いといえる。それゆえ、クリブケンシュタインの言うように、「+」によって特定の関数を意味することが我々にはできないのだとしても（実際、できないのだと私は思うが、「+」の

使用における子どもの傾向性は、速やかに唯一特定のものとなる。もちろん、色を表す言葉についても、前言語的な識別能力との直結度は高く、「丸い」などと同様、その外延は容易に確定されるものと考えられる。

ただし、言語使用における傾向性は、外延の割り当てを可能にしはするものの、意味することに期待されていた特性を、そっくり代行するわけではない。とりわけ、1で見たとおり、傾向性そのものは規範性を内に宿していない。すなわちまず、言葉の適用を自然法則的な傾向性の発現として扱うならば、私ガもし、四角いものを指して「丸い」と言ったとしても、それは間違っていると言わざるをえない。いっぽう、それを工学的な傾向性の発現として扱うとしても、私にどのような設計（設計意図）をあてがうべきか——四角いものを指して「丸い」と言ってしまったという目下の場合を、誤作動とする設計か、それとも正作動とする設計か——を、私の物理的構造そのものから割り出すことはできない。しかし、そうした「丸い」の適用は、観察者の観点から割り当てられた外延を逸脱するものであり、それを含む発話は偽とされる。したがってここでは、言葉の使用に対する規範が使用者に対して外付けされている、と言えるのかもしれない。

なおもちろん、事物に対する前言語的な識別能力に、その適用における傾向性が直結していると考えうる言語表現は、かなり限られている。日常的に用いられる言葉の多くは、自然物としての共通性をもたない多様な事物の集合をその外延とするものであり、そうした言葉の使用における傾向性がかたちづくられるうえで、明らかに、言語共同体が不可欠な役割を果たしている。だが残念ながら、この点についての詳述は、他日に譲らざるをえない。

にまつわる疑惑に話を移そう。先述のとおり、我々が言語表現によって何ごとかを意味するということとは事実たりえず、そして「丸い」によって…を意味している」という言明の役割が、におけるそれに尽きるとすれば、もし我々が一致して無自覚に、四角いものに対して「丸い」という判断を下し始めたとしても、「丸い」によって自分たちの意味していたことに我々は無自覚に背き始めた、とされるべき状況であることにはならない（グループ式の性質を導入すれば、我々は「丸い」を、まさに同じ仕方でも適用し続けている、と覚えてしまう）。「こうした帰結はいかにも奇っ怪だというのが、にまつわる疑惑であった。

問題の一つは、我々が何ごとかを意味するということは事実たりえないと認めたらうで、「意味している」を含む言明に、我々がある言語表現で自分たちの意味していたことに足並みを揃えて無自覚に背き始めた、とされるべき状況が特定されるような用いられ方を、見つけてやることができるか、ということである。見つかるのかもしれないが、率直に言つて、そんなものはないからなくてもかまわない、と私は思っている。なぜなら、繰り返すが、我々が何ごとかを意味するということは事実ではありえず、あくまでも擬制なのである。擬制としての意味することに對して、それが事実であった場合に成り立つことがそっくり再現されていないと不平を言うのは、筋違いというものだ。上記の状況（の擬制的形態）の可能性を確保できないことについては、意味するという心的状態を自他に帰すことの擬制性が、まさにそうした仕方で露呈していると理解されてもいいはずである。

しかしまた一方で私は、我々が一致して無自覚に四角いものを「丸い」と判断し始めたら、やっぱりそれは、「丸い」によつて自分たちの意味していたことに、我々が無自覚に背き始めたということではなければならない、という申し立てにはたしかにもつともなところがあり、そして、意味するという概念に訴えなくても、こう申し立てる人を満足させることはできると思う。——実際、今まさに我々の「丸い」の使用にそうした激変が生じているとしたら、我々の生活は大変な混乱をきたしていることだろ⁽¹⁹⁾う。私の観点からすれば、この混乱を実際にもたらしめているのは、「丸い」の使用における我々の傾向性の、世界のあり方からの驚くべき乖離である。すなわち、我々はなぜか、かつての傾向性に基ついて割り当てられる外延から全く逸脱した仕方で、「丸い」を適用するようになってしまったのだ。したがつていまや、「丸い」を含む我々の言明は、その外延に照らせばほぼ全てが偽なのである。そして、自分たちの陥っている混乱のあり方を分析した結果、我々はまさに、そうした結論に到達するかもしれない。さて、先のように申し立てる人は、これで満足してはくれないだろ⁽²⁰⁾うか？

もともと私が目指してきたのは心の自然化であつた、ということをお願い出していたきたい。言語表現によつて何ごとかを意味するという素朴心理学上の心的状態は擬制であるということが示され、しかも、この概念に頼らなくても言語論は問

題なくやっつけていけるということが判明すれば、心の自然化プロジェクトとしては、一歩前進なのである。そして、これまでに見た範囲については、言語使用における傾向性に訴えることで、意味するといった心的状態に期待されていたことはほぼできてしまつたということが示されたと思う。しかし、今回は対処しやすいくところだけを扱ったにすぎず、この先に厄介な問題が山積していることは、私も承知している。

註

- (1) Cf. Kripke, Saul A., 1982, *Wittgenstein on Rules and Private Language: An Elementary Exposition*, Basil Blackwell. 黒崎宏訳『ウィットゲンシュタインのパラドクス』、1983年、産業図書。
- (2) 篠原成彦 1993年「意味を自然化する」日本科学哲学会論『社会学』、26冊、121-132頁。
- (3) Cf. Kripke op. cit., p.55. 邦訳108頁。
- (4) Cf. *ibid.*, pp.1-54. 邦訳11-107頁。
- (5) この関数 f を「クリプケンシュタインはマティションならぬ「クワディション」と呼ぶのである」。Cf. *ibid.*, pp.9-13. 邦訳14-18頁。
- (6) だが上述の「+」に対しては難なく使えることは明らかである。Cf. *ibid.*, p.20. 邦訳37-38頁。
- (7) Cf. *ibid.*, p.20. 邦訳38頁。
- (8) Cf. *ibid.*, p.59, n.45. 邦訳115-116頁。注(四四)。
- (9) Cf. *ibid.*, pp.38-39. 邦訳72-75頁。
- (10) たとえば、歳をとってしまえば物忘れをしてしまうことについては、脳の組織が劣化したための誤作動とみなすこともできるが、加齢という予定されたプロセスが順調に進行している状態とみなすこともできる。

- (11) Cf. *ibid.*, pp.28-32. 邦訳54-61頁。
- (12) Cf. *ibid.*, pp.35-37, n.24. 邦訳66-70頁。注(二四)。
- (13) Cf. *ibid.*, pp.52-53. 邦訳101-104頁。
- (14) Cf. *ibid.*, pp.71-102. 邦訳138-199頁。
- (15) この問題を指摘したのは、J・ニールとW・Cf. Wright, Crispin, 1984: “Kripke’s Account of the Argument against Private Language”, *Journal of Philosophy* LXXXI, pp.759-778. 松本洋之訳「クリプキと反私的言語論」『現代思想』1985年12月臨時増刊号、青土社、44-63頁。
- (16) 篠原前掲、127-130頁。
- (17) しばしば識別される事物の種類や性質そのものが動物種に相対的である。色はその顕著な事例だ。また、前言語的な事物の分類は必ずしも生得的であるわけではない。たとえばハトについては、鳥、魚、樹木、人間といったカテゴリーを経験的に形成できることが以前から知られている。(参照：美森正子、2010、「動物におけるカテゴリー研究：人工カテゴリーの学習、プロトタイプ効果、カテゴリー事例の等価性について」*Cognitive Studies* 17(1)。
- (18) 針生悦子・今井むつみ、2000年、「語意学習メカニズムにおける制約の役割とその生得性」、今井むつみ編著『心の生得性——言語・概念獲得に生得的制約は必要か』、共立出版株式会社、141-142頁。
- (19) こうした想定に基づく啓蒙的な思考実験が丹治によってなされており、ここでの私の考察は、そこからおおいに示唆を受けている。丹治信春、1996年、『言語と認識のダイナミズム——ウィットゲンシュタインからクワインへ』、勁草書房、53-59頁。

(信州大学人文学部・准教授)